

ホマトン・カレッジでの2週間 — Bell Teacher Campus 2018に参加して

Language and Methodology Refresher: Secondary / Adults のコースを受講

7月29日から8月11日までの2週間イギリスのケンブリッジでの英語教員研修プログラムに参加させて頂きました。Bell Cambridgeが近隣のホマトン・カレッジ(Homerton College)と提携していて、そこで授業が行われ、学内にある寮に2週間滞在しました。市街から少し離れたところにある閑静な住宅街にホマトン・カレッジがあり、ケンブリッジの学術都市としてのアカデミックな雰囲気がそこにはありました。31もの国籍の違う先生方がこの教員研修プログラムに参加しており、特にEU圏内から



の参加者が非常に多かった印象です。基本的なスケジュールは、朝90分の選択したクラスを2コマ、午後1コマのクラスがあるか、もしくはワークショップか文化トーク(cultural talks)を受講することになっていました。途中で休み時間を挟むものの、9時15分から3時半ぐらいまで勉強をしていたことになります。



その後は自由時間なので、市街に繰り出して荘厳なカレッジ群を見学したり、学校が提供してくれた様々なソーシャル・プログラムに参加することが可能でした。例えば、週末はロンドンに半日観光に行ったり、ある晩はカレッジの庭園を貸し切って行われるシェイクスピアの劇を観に行くこともできました。その他にこのプログラムの大きな特徴は、選択したコースだけではなく、英語教育に関するより実践的なワークショップや、イギリスの文化、ケンブリッジの隠れたお薦めスポットを教えてくれるなどの文化トークが週に2回ずつありましたので、参加者は自由にそれぞれを選択して申し込みました。先生方の興味や関心、個性が反映されたクラスばかりで、どれもとても楽しく参加できました。最初の opening ceremony では、専門分野のコースを学ぶだけではなく、ワークショップや文化トークなどで見聞を広めたり、ケンブリッジでのキャンパス・ライフを楽しみながら自身を成長させることも大切だとプログラム・ディレクターからのお話もあり、この教員研修プログラムは専門分野だけの教授だけではなく様々なクラスに参加させることで、多角的に職能教育(professional development)を提供することを目的としていることがうかがえました。

参加者は、Educational Technology Today、Language Improvement for Teachers、Creativity in the Classroom などいくつかのコースから選択できるようになっていて、私は Language and Methodology Refresher: Secondary / Adults という中等教育レベルの生徒から大人に英語を教えるための方法論のコースを受講しました。私のクラスはイタリア4名、日本2名、香港1名、ポーランド1名、エストニア1名、カザフスタン1名の総勢10名でした。





最新の第二言語習得の方法論(Methodology)と、参加者の語彙の使い方をより自然な英語にするために様々なアクティビティを通じて語彙を学び直す(Language: Lexical Approach)の2つの面を重視するコースでした。Methodologyの面では、担当インストラクターが方法論を理論ベースで講義をするのではなく、実際に参加者を生徒役に割り当ててタスクをさせた後で、そのタスクと方法論との関連性を学ぶという手法をとっていました。Languageの面では、インストラクターが参加者の言い間違えや文法的には正確ではあるけれどもっと自然な言い回しがある場合には reformulation という方法で参加者に説明してくれました。しかし、それを後日ゲーム形式ではありましたが参加者にテストが毎

回課され、全く気が抜けないばかりかほとんど答えられずに終わってしまうことも多かったです。しかし、説明されるだけですと記憶が忘却の彼方へ消えてしまうので、楽しみながら(?)テストをする方法により語彙が定着したのではないかと感じています。2週間という短期間のコースではありましたが、綿密に構成され、教員のニーズを的確に反映した内容だったと思います。

教員研修プログラムで感じたことと今後

思えば、私にとっては今回のプログラムの参加は初めての留学でした。大学時代に留学を経験したことがなく、教職に就いてからのちに国内にあるアメリカの大学院に通い、そこでは国内留学しながら英語しか使用していませんでしたが、事実上今回が初めての留学と言えるのかもしれません。そのような背景もあって、私は様々な異文化コミュニケーションのギャップだけではなく、言語的なギャップをより一層感じるようになりました。



授業では非常に活発に議論が行われ、インストラクターが何か質問をしたとたんすぐに反応して自分の意見を言うという参加者がほとんどでしたので、私は気後れしてしまい、初めのころ発言がほとんどできませんでした。私は質問されたら少し考えてから発言をしたいタイプなのですが、彼らは思い立ったらすぐに言葉を発していて、コミュニケーション・スタイルがかなり違うのだと実感しました。また、議論の中で使われている語彙も知らないものが多く、途中で話の流れを見失うことも度々あり、自身の語彙力の不足に気づかされました。何とか私のこの2つの弱点を少しでも克服しなくては!とコースが始まって数日後に奮起し、それならば質問を少しでもしよう、と心に決め、参加者が一通り白熱した議論をしたのちに、「私はこれに関して〜だと思っただけ、△と○はどう違うのか?」とか、「これに関しては、~な考え方は適用できないか?」などなるべく具体的に質問するようにしました。コミュニケーションの問題を感じたときに、どのように対処すべきか、どのような戦略を取るべきかなどを考えることが重要であるということ

を学びました。しばらくすると、クラスメイトとはお互いの教育的価値観など複雑ではありましたが、興味深い話を共有できるまでに至りました。

1週間を過ぎたあたりで、この状態は私がエッセイで書いたことを私自身がまさに体験しているのでは?と思うようになりました。エッセイでは、「日本の英語教育は文法や語彙などを学習させるだけではなく、英語をリンガ・フランカとして使用する人たちの文化的側面も取り入れた教授法を実践するべきで、その中で生徒の異文化コミュニケーションやクリティカル・シンキングのスキルを身に着けさせるべきではないか。そのためには教員自身が様々な異文化コミュニケーションを体験することが不可欠である。」という主旨の内容を述べました。教員自身が今回のような国籍が様々な参加者から成り立つプログラムを受講し、実際に異文化コミュニケーションを通して様々な成功や失敗体験を繰り返すことで、リアルな実体験を生徒に伝えたり、そこから得たアイデアを教材や指導計画に盛り込むことができます。特に海外旅行も留学の経験もない生徒にとっては、教員による実体験に基づく情報は彼らの英語学習への意識向上や、スキルを伸ばすことにも貢献できると確信しています。



教員も英語学習者として自身の英語力を高めるために日々試行錯誤しながら努力を積み重ねている姿を生徒に見せることが大切です。特に英語で話す、書くというアウトプットのスキルの向上は必須と言えるでしょう。英語教員が、言語知識を教える役割だけではなく、彼らの英語学習者としてのロール・モデルとなれるように様々な職能教育(professional development)の機会をできるだけ多く受けられることが望ましいと思います。世界では英語がリンガ・フランカとして使用されつつあり、実際に英語を使用する時には異文化コミュニケーションの知識や感覚が必要となってきます。そのように英語の役割がダイナミックに変化する

現況において、英語教員の役割も大きく変わらなければならないということを私たちは強く認識し、指導法にも反映させていく必要があると思います。そのためには、今回のような教員研修プログラムの内容や意義を先生方にお伝えしていくことも大変重要なミッションであると感じています。